

2024年9月9日

能代市長
齊藤 滋宣 殿

一般社団法人 日本建築学会 東北支部
支部長 松本 真



旧仁鮎小学校校舎・体育館の学術調査に関する要望書

拝啓、時下ますます御清祥のこととお慶び申し上げます。

平素より、本会の活動につきましてご理解とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、旧仁鮎小学校の解体工事に関して、市民有志をはじめ、木の建築フォーラムからも保存活用や記録調査の要望が提出されている旨、うかがっております。仁鮎は天然秋田杉の保護林を擁して、木都・能代の発展を支えた秋田杉の木材産出地として知られ、その地元である仁鮎小学校の秋田杉が豊富に用いられた校舎・体育館については、すでに本会による『日本近代建築総覧』に、貴重な近代建築としてリストアップがなされておりました。

しかしながら校舎・体育館とも、いわゆる文化財的価値を明らかにするための学術的調査には至っておりませんでした。秋田杉を用いた伝統技術・意匠の特徴については、いまだ不明な点が多い現状があり、旧仁鮎小学校の建築学的な特徴や価値が記録されることで、今後の歴史・文化的な地域づくりの資料とすることもできると考えられます。

現在、解体工事が開始されようという段階にあることは重々承知しておりますが、上記の観点にたった記録が十分に継承されないままとなる可能性を危惧し、本会としても可能な範囲で、歴史的建造物調査の実施をお認め頂きたく存じます。

なお本会東北支部は、別紙・木の建築フォーラム8月13日付要請書「旧仁鮎小学校の学術調査のための解体工事の一時停止と立ち入り調査の許可のお願い」で示した調査について、学術的な見地から同調査を共同実施する立場でありますことを申し添えます。

貴下におかれましては、この貴重な建造物のもつ歴史・文化的な意義についてあらためてご理解いただき、格別のご配慮を賜りたくお願い申し上げます。

敬具

連絡先

一般社団法人 日本建築学会東北支部

〒980-0011 仙台市青葉区上杉1-5-15 日本生命仙台勾当台南ビル4階

TEL 022-265-3404 FAX 022-265-3405

E-MAIL : aij-tohoku@nth.biglobe.ne.jp

2024年8月13日

能代市長 齊藤 滋宣 様

旧仁鮎小学校の学術調査のための、
解体工事の一時停止と、立ち入り調査の許可のお願い

- ・特定非営利活動法人 木の建築フォーラム（理事長 大橋好光）
- ・大橋好光（東京都市大学/名誉教授）：専門分野 木造建築
- ・安藤邦廣（筑波大学/名誉教授）：専門分野 伝統的木造建築
- ・腰原幹雄（東京大学生産技術研究所/教授）：専門分野 木造建築、建築構法
- ・中村琢巳（東北工業大学建築学部/准教授）：専門分野 建築史
- ・後藤 治（工学院大学建築学部/教授）：専門分野 建築史

申請者代表

大橋好光（特定非営利活動法人 木の建築フォーラム/理事長）

申請代表（団体名） 特定非営利活動法人 木の建築フォーラム

同 住所 東京都文京区後楽 1-7-12 林友ビル4階 〒112-0004

同 連絡先 TEL：03-5840-6405 FAX：03-5840-6406 E-mail：office@forum.or.jp

旧仁鮎小学校の校舎・体育館等は、添付の中村准教授の考察にあるように、建築学的に貴重な遺構と推察できます。しかし、十分に調査されたとは言えません。こうした建物は、十分な学術調査を行ない、建築学上の価値、及び文化財としての意義等を調査し、それを記録する必要があります。以上より、解体工事を一時休止し、校舎・体育館へ立ち入っての、建物・内容物調査を実施したく、調査の許可をお願いするものです。

1. 目的：

旧仁鮎小学校の建築学上の価値、及び文化財としての意義等を調査し、記録する。

2. 調査日時：

2024年9月～10月、延べで10日間程度

3. 調査内容：

旧仁鮎小学校の建築学的・文化財としての評価のための調査。

架構、各部寸法、使用材料、加工内容等の採寸、写真撮影など。

4. 調査メンバー：

特定非営利活動法人 木の建築フォーラムを中心とする、旧仁鮎小学校調査チーム

なお、この「お願い」は、面会してお渡しする予定でしたが、かないませんので、郵送致しました。回答を、8月26日までによろしくお願いいたします。

仁鮎小学校校舎・体育館の文化財的価値について

中村 琢巳

東北工業大学 建築学部建築学科／准教授

由緒

現存する仁鮎小学校校舎は、大正 13 年 5 月 3 日に発生した「仁鮎大火」による類焼後の再建によって、昭和 4 年 1 月 14 日に響村立の「響小学校」校舎として完成したものである。響村の仁鮎小学校は、明治 10 年の創立時は民家を借りた小学校であったが、明治 13 年にはじめて独立した校舎が建てられた。現在地に移転したのは明治 33 年のことであった。昭和 22 年には、響村立仁鮎小学校と改称されている（『二ツ井町史』昭和 52 年）。

この一方で、響村役場の資料から集成された『郷土史ひびきむら』（昭和 31 年）には、「本年度（昭和 3 年）及び明年度（昭和 4 年）の二ヶ年連続事業として之を新築するの議起り十月の村会の議決を得、雨天体操場百廿八坪は年度内完成をみたり」「響小学校校舎及び付属建物新築事業は建設委員をあげて協議の上、七月五日（昭和 4 年）入札直ちに工事着工十一月竣工」とあって、前述の町史による竣工月とは齟齬がみられる。

大工棟梁は、地元の「畠山福次郎」（畠福と呼称される）が手がけたという。一方、日本建築学会による全国の貴重な近代建築調査を目録化した『近代建築総覧』には、仁鮎小学校の施工者として「宮崎喜助」と記載されている。聞き取りによっても、宮崎の名は地元知られておらず、この人物の詳細は不明である。

このように仁鮎小学校新築の経緯については不明な点が多く、旧響村役場の行政資料の確認等の作業が必要と考えられる。加えて、この時期は校舎の小屋組に上棟年月日や建築関係者の名を示した「棟札」が打ち付けられていることもあり、棟札の確認作業も求められる。

前述の『二ツ井町史』によれば校舎新築の後、昭和 16 年 5 月 12 日に東校舎、昭和 27 年 7 月 30 日に体操場が落成した。昭和 46 年にプール建設、昭和 51 年 12 月には創立百周年記念事業として図書館改装や机、椅子購入、成田為三記念碑建立などが行われた。

立地及び景観的特徴

集落中心の小高い大平山へ向かう高台に立地し、大きな寄棟屋根が銀杏橋からも望見できる景観を呈している。また通りからのアイストップに体育館の切妻造り妻入り屋根が位置することからも、集落景観を特徴づける存在となっている。

北西に正面を向けて校舎及び体育館がコの字型に張り出すように配置される。東側に寄棟造りで L 字型に校舎が立ち、西側に切妻造りで妻面を通り側に向けて体育館が接続する。中央に玄関ポーチを張り出しながら、左右は非対称の外観としている。木造二階建て、棒トタン葺きで外壁

は下見張り。木製の窓枠をとどめるが、外壁建具はアルミサッシに交替されている。

校舎の外観の特徴は、中央の玄関部分に意匠を凝らす点である。脚部に洋風の線形をつけた独立柱2本を配置し、隅切の切妻屋根を張り出させて、その破風板は5本の持ち送りが支持する。この軒先の持ち送りは洋風意匠を目指しながら、積雪の軒折れを防ぐ効果もあり、雪国の近代建築で多用されるものである。垂木を吹き寄せとしているのも、洋風の新しい意匠を狙ったものと考えられる。一階玄関の外観に呼応するように、二階部軒先も中央で切り上げたペディメントの意匠をみせて、5本の持ち送りが破風板を支持する。その形状は洋風というよりも、あたかも寺院建築の臺股に類似し、大工の創意による意匠と思われる。こうした玄関部分の外観意匠は昭和初期、地方の大工が学校建築に際して、新しい意匠をつくりだそうと創意工夫した様子をよく物語る。

校舎の平面および内観については、調査に至っておらず、その特徴は未詳である。しかしながら玄関部分に集約された意匠的な工夫をみる限り、内観でも昭和初期らしい大工独自の工夫があると推察される。

西側の体育館も、全体としては下見板張りの簡素な外観意匠とする。通りに面する妻面の束を吹き寄せとして変化をつける。前述の通り、アイストップとなる景観を意識したものと思われる。その内部は壮大な木造立体トラスで構成されるが、内観調査に至っておらず、体育館の建築的特徴も詳細は未詳である。

文化財的な価値について

校舎および体育館ともに、内部調査に至っておらず、内観意匠や平面形式などの特徴は未詳である。しかしながら仁鮎小学校校舎および体育館の建設の経緯と外観を観察する限り、以下に示す文化財的な価値を指摘することは可能である。

1. 意匠的価値

林産地の大規模な小学校建築であり、現在は入手困難な天然秋田杉の良材がふんだんに使用されたと推察される。地方の大工が手がけた、昭和初期の時代性を物語る独特な意匠が散りばめられていることもあわせて、現在では再現不可能な建築である。立体トラスについても、昭和期に構造手法の細やかな変遷が知られており、体育館の構造もまた、時代的特徴を備えたものと考えられる。すなわち、材料、意匠、構造手法の各点から再現することが容易でない建物といえる。

2. 景観的価値

微高地にたつその立地と大屋根の外観形式によって、遠くからも望見できる点も本建物の大きな景観的価値である。体育館の妻面の意匠と通りのアイストップの立地も考慮されており、当建築の新築に際しては地域の象徴となる外観意匠が意識的に施されたことが推察される。さらに、その後背地には当地の産業を支えた秋田杉の森林が控え、かつての運材・貯木を支えた米代川も

本建物に近接する。すなわち、通りや遠望からの視覚的な景観的価値に加えて、山・川という林業を支えた景観要素と一体となった景観的価値も備えている。

3. 秋田杉にまつわる産業遺産としての価値

仁鮎小学校は、学校建築としてだけでなく、産業遺産としての位置づけも可能である。木都・能代を代表する歴史的建造物として、国登録有形文化財「金勇」がよく知られている。金勇が立地する能代市街は製材などの木材集積・加工の地であり、まさに天然秋田杉を擁する仁鮎とはその産業遺産としての地域特性が異なる。仁鮎小学校の周辺には、天然秋田杉の森林にとどまらず、貯木場から森林鉄道跡などの林業関連史跡が点在する。大正8年に刊行された『仁鮎の森林』（能代小林区署）には、当地の多彩な林業の様子が豊富な写真とともに記録されており、歴史的林業地としての仁鮎の価値を高めている。

仁鮎小学校の存在は、こうした周辺の林業関係史跡や金勇などの歴史的建造物群と連携することで、森林から伐木、運搬、貯木、製材、加工という一連の能代市の秋田杉林業の魅力発信に結び付く優れた産業遺産として位置づけることもできる。比較的広い教室群が並び、かつホールや体育館をもつ仁鮎小学校は、観光・地域施設を包含する拠点としての転用がやり易い空間特性をもつことも有利である。

学術調査および記録づくりの必要性

以上のように仁鮎小学校校舎および体育館は、国登録有形文化財の基準となる意匠的な価値、景観的な価値、再現不可能な価値をすべて備える希少な建物といえる。しかしながら、建築当時の響村役場資料や図面、棟札などの関連資料が乏しい状況でもある。すでに日本建築学会による『近代建築総覧』（1980）や秋田県教育委員会による『秋田県の近代和風建築』でも貴重な建物としてリストアップされているものの、これまでに学術的な文化財調査が実施されていないためである。棟札や墨書の確認を含めた、内観の調査や役場資料調査などが実施できれば、その価値はさらに高まるものと考えられる。

歴史的建造物を未来の魅力ある地域づくりへ活かす方策には、全面的な保存再生から、部分保存、移築、部材転用、そして記録保存といった幅広い可能性がある。これらの方策の検討には、まずは学術的調査による価値や建築的特徴の評価が基礎となる。同時に、学術的な文化財調査が未実施のため、貴重な仁鮎小学校校舎および体育館の記録が継承されないまま、建物自体も消失してしまう可能性も危惧される。地域の歴史文化の記憶を伝承する記録づくりという視点でも、学術調査の実施が望まれる。